

| | |
|-------------|------------|
| 群 教 セ | H 0 1 -0 1 |
| | 平 15 214 集 |

身近な自然に親しむ幼児の育成

— 園内の動植物と触れ合う環境の構成の工夫 —

特別研修員 村樫 みどり (伊勢崎市立豊受幼稚園)

I 主題設定の理由

情報化が進み、間接体験により自然の様々な出来事や事象などを容易に見たり、知識を得たりすることができるようになった。反面、身近な自然と直接触れ合い、驚きや感動など心を揺り動かす体験をする機会は少ない。家庭生活でも、車で忙しく移動し、親子で道路をゆっくり歩いて楽しんだり、夕焼けに心動かしたりするゆとりも少なくなりつつある。そこで、幼児に身近な自然と触れ合う機会をたくさんもたせ、身近な自然のおもしろさ、不思議さ、雄大さ、美しさ、こわさなど自然を感じる心を育て、身近な自然を親しめる幼児を育成したい。

幼児期は本来、好奇心が旺盛で、自ら環境にかかわろうとする時期である。自ら様々な物に触れて興味をもち、気付いたり発見したり、驚いたり考えたりすることは、幼児の認識や思考力を高め、豊かな心情や好奇心を培うことになる。小動物に餌を与えたり、草花で遊んだり、種や実を育てたりすることなどを通して感動する体験は、身近な自然への親しみを感じさせ、科学的な見方や考え方の芽生えを培う基礎となる。「ぐんま幼児教育プラン」においても身近な自然と触れ合い、感動したり、汚れたり、具体的に試行錯誤したりして豊かな生活体験をさせてほしいと述べられている。そこで、園内の動植物と触れ合う環境を工夫して構成し、身近な自然に親しませていきたいと考えている。

本学級の幼児 20 名（男児 11 名、女児 9 名）のうち、17 名が初めての集団生活である。それぞれに、ブロックでいろいろなものを作ったり見立てたり、音楽に合わせて歌ったり踊ったり、衣装を身に付け遊具を持ってままごとやごっこ遊びを楽しんだりしている。しかし、身近な自然との触れ合いは少なく、室内でばかり遊びたがったり、保育室に入ってきた昆虫をこわがったり、飼育栽培物に気付かなかったりすることがあり、身近な自然と触れ合う楽しさを味わっていないようにとらえられる。

今までの保育を振り返ると、幼児の小さな発見や驚きを受け止めたり、偶然の様々な自然現象に気付いたりしてはいるものの、身近な自然と触れ合う楽しさを計画的に感じさせたり、ため込んだりする環境が、偶然性に任せて消極的であったのではないかと反省する。「カエルはペタペタして冷たくて気持ちがいい。」「ウサギはフワフワして温かい。」と素直に感じている姿を見ると、幼児は、体験してみれば身近な自然から様々な事を感じられることがわかる。

そこで本研究では、幼児が園内の動植物に対しどう気付いたかを理解し、[動植物と触れ合う環境の構成] に視点を当てた工夫をすることで、身近な自然に親しむ幼児を育成したいと考え本主題を設定した。

II 研究のねらい

幼児が園内の動植物と触れ合う環境の構成を工夫することで、身近な自然に親しむ幼児を育成できることを実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

好きな遊びをする時期、友達と一緒に遊ぼうとする時期、友達と遊びを楽しもうとする時期に、次のような環境の構成を工夫すれば、身近な自然に親しむ幼児を育てられるであろう。

- 1 好きな遊びをする時期に、園内の動植物の存在に気付かせるような環境の構成を工夫すれば、園内の動植物に興味をもって触れ合い、園内の動植物を見つけて遊ぶ楽しさを味わうようになるであろう。
- 2 友達と一緒に遊ぼうとする時期に、園内の動植物から発見や驚きを感じられ、触れたり、取り入れたりして遊べるような環境の構成を工夫すれば、園内の動植物と触れ合って遊ぶ楽しさを味わうようになるであろう。
- 3 友達と遊びを楽しもうとする時期に、園内の動植物をきっかけに身近な自然と触れ合えるような環境の構成を工夫すれば、興味を広げ、好奇心を抱いて遊ぶ楽しさを味わうようになるであろう。

Ⅳ 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 身近な自然に親しむ幼児について

身近な自然に親しむ幼児とは、幼児が身近な自然の存在に気付き、興味をもち、発見を喜び、不思議さに心を動かしたり、自分の生活と結び付けて考えたりして、身近な自然と触れ合って遊ぶことを楽しもうとする幼児であるととらえる。

具体的には次のような姿である。

- 小動物と触れ合って遊び、驚き、こわさ、かわいさ、おもしろさなどを感じる。
- 栽培物の存在に気付き、見たり世話をしたりする。
- 栽培物を育て、発見したり、収穫したりして喜ぶ。
- 身近な自然の不思議さに心を動かし、試したりさわったりして繰り返し触れ合おうとする。
- 虫と触れ合って遊び、驚きやおもしろさを味わう。
- 身近な自然から、季節を感じる。
- 身近な自然を進んで遊びに取り入れ、幼児なりの意味づけをする。
- 身近な自然に触れ、じっくり見たり確かめたりして、興味を広げる。
- 身近な自然と触れ合う心地よさや解放感を味わう。
- 身近な自然と触れ合い好奇心を抱く。

(2) 園内の動植物と触れ合う環境の構成の工夫について

園内の動植物と触れ合う環境の構成の工夫とは、幼児が園内の動植物の存在に気付き、かかわって感じる思いを受け止め、園内の環境の構成に視点を当て、園内の動植物と触れ合って遊ぶ楽しさを味わえるように援助するなどの工夫をすることであるととらえた。具体的には、幼児のこわさ、驚き、美しさ、不思議さ、心地よさなどの様々な思いを、幼児の表情やつぶやき、動きや歓声、会話など幼児なりの表現から受け止め、幼児が身近な自然と親しむ要因と考え合わせて、園内の動植物との触れ合いを楽しめる遊びの教材研究をして、環境を構成する。発達時期や季節感を考慮し計画をたて、園内の動植物と触れ合って遊べるように援助していく。その中で、幼児の思いや幼児なりの見方や考え方を大切に、幼児が五感を通して直接体験でき、喜んで触れ合えるような個々に応じた援助を繰り返す環境の構成をすることである。

身近な自然に親しむ要因を次のようにとらえる。

- ・ 幼児が自分の手で、扱える。
- ・ 幼児が興味をもち、広げる。
- ・ 幼児が季節感を感じる。
- ・ 幼児が驚きや不思議さを感じる。

園内の動植物の存在に気付かせる環境の構成、驚きや発見を楽しみ遊びに取り入れる環境の構成、興味を広げ園内の動植物とのかかわりをきっかけに身近な自然と触れ合える環境の構成を工夫していきたい。

2 研究の方法

研究の見通しに基づき、以下の計画で保育実践を行い、検証する。

(1) 実践計画

| | |
|----|-------------------------------------|
| 対象 | 伊勢崎市立豊受幼稚園 2年保育 4歳児 20名（男児11名・女児9名） |
| 期間 | 平成15年6月～11月 |

(2) 検証計画

| 検証項目 | 検証の観点 | 検証方法 |
|------|--|-------------------------------------|
| 見通し1 | 幼児がそれぞれに好きな遊びをする時期に、自分の手で扱える虫がいる雑草園での遊びを設定し、虫の存在に気付かせる環境の構成を工夫することは、虫に興味をもって触れ合い、見つけて遊ぶ楽しさを味わうようになるために有効であったか。 | 教師による観察法にて、環境の構成の有効性と幼児の変容をとらえ分析する。 |
| 見通し2 | 幼児が友達と一緒に遊ぼうとする時期に、発見や驚きを楽しみ、触れたり、遊びに取り入れたりする環境の構成を工夫することは、色水になる植物と触れ合って遊ぶ楽しさを味わうようになるために有効であったか。 | ・ 幼児の表情やつぶやきから ・ 感動の言葉や歓声から |
| 見通し3 | 幼児が友達と一緒に遊びを楽しもうとする時期に、園内の動植物をきっかけに身近な自然と触れ合い遊べる環境の構成を工夫することは、興味を広げ、好奇心を抱いて遊ぶ楽しさを味わうようになるために有効であったか。 | ・ 興味や疑問等の発問から ・ 擬似表現や友達との会話から |

V 研究の展開

2年保育4歳児の教育課程Ⅱ・Ⅲ期を踏まえて、幼児の実態に即し「園内の動植物との触れ合い」に視点を当てた環境の構成を工夫し、実践する。

1 4歳児のⅡ期・Ⅲ期の指導計画

(伊勢崎市立豊受幼稚園教育課程より抜粋)

| 期 | Ⅱ期 (6月中旬～9月) | Ⅲ期 (10月～12月) |
|-----|---|---|
| ねらい | <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師や友達と一緒に、戸外で体を動かして遊ぶ。 ・ 身近な自然物等に触れながら、動植物に興味をもつ。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 戸外でのいろいろな遊びを楽しむ。 ・ 身近な自然物等に触れながら遊ぶ。 ・ 自分の思いを言葉で伝え、友達と一緒に遊ぶ。 |
| 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・ いろいろな運動遊びや遊具などで、友達と一緒に遊ぶ。 ・ 身近な草花や木の実等を利用して遊んだり、虫等に触れたりして遊ぶ。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 戸外でのいろいろな遊びを楽しみながら、体を動かして遊ぶ。 ・ 自然物を利用して遊び、身近な季節の変化に気付く。 |

| | | |
|---------------|--|--|
| <p>主な環境構成</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児が興味をもち、全身で遊べるダイナミックさがある環境を用意する。 ・ 幼児が直接触れたり、匂いをかいだり食べたりできる栽培物を準備する。 ・ 一人一人の見方や考え方を大切にする援助をし、偶然性も配慮し、出来事を柔軟に受けとめられるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児が気付きや発見を繰り返し、好奇心を抱き、広げられるような身近な自然物をいつでも触れられるようにしておく。 ・ 季節により感触や感じ方が異なる体験ができるような環境を構成する。 ・ 触れ合って遊ぶことで、楽しさが感じられるように配慮する。 |
|---------------|--|--|

2 身近な自然に親しむ要素を取り入れた環境の構成

| 時期 | 好きな遊びをする時期 | 友達と一緒に遊ぼうとする時期 | 友達と遊びを楽しもうとする時期 |
|---------|---|---|---|
| 物的環境の構成 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 戸外でのびのび遊んだり、虫探しをしたり、花摘みをしたりとできるような場を設定し、雰囲気作りをする。 ○ 興味をもてるような飼育栽培物を用意する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 草花や虫等を見つけたり、とったりできる花畑や畑の整備やそれらと触れ合える遊びを準備する。 ○ 小動物に触れる機会をもてるように準備したり、水遊びができるように遊具や用具を準備したりする。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 幼児が興味をもちそうな自然環境を見直し、職員間で共通理解する。 ○ 地域の身近な自然物も教材として扱えるように話し合い、準備する。 ○ 生長や収穫が期待できるような飼育栽培物を用意する。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ☆ 金魚、メダカ、アリ、シロツメクサ、インコ、ダンゴムシ、バッタ等 ★ ウサギ、カメ、草花、チューリップ等の花 ◆ 虫の羽音、鳴き声等 △ ジャガイモ、カブ、イチゴ、タマネギ等 | <ul style="list-style-type: none"> ☆ 色水、たたく染、フーセンカズラ、ザリガニ、オシロイバナ、ヒマワリ、パンジー、チョウ等 ★ 砂場、土山、水溜り、芝山 ◇ 草花や葉、ハーブ、カイツカイブキ ◆ 雨の音、雷 △ トマト、キュウリ、ナス、ピーマン、カボチャ、スイカ、メロン等 | <ul style="list-style-type: none"> ☆ 影、葉の色、ツバキの実、小石、空、コオロギ、カマキリ、イチョウの葉、雲等 ★ ドングリ、フジの実、ヒマワリの種 ◇ キン、ギンモクセイ、ネギ等 ◆ 落ち葉の音、風の音 △ サツマイモ、カキナ、ブロッコリー、ニンジン、ラッカセイ等 |
| 人的視点の構成 | <ul style="list-style-type: none"> ○ いつでも安心して取り組めるような言葉かけをしたり、誘ったりして一緒に遊ぶようにする。 ○ 一人一人の様々な感じ方を大切にし、話を聞いたり表情を見たりしながら、それぞれの思いを受けとめる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 幼児一人一人の思いを受けとめるようにし身近な自然への興味をみとる。 ○ 幼児の驚きや発見に共感し、身近な自然と触れ合えるような援助をする。 ○ 幼児の五感で感じ取る心の動きを、表情や言葉などから察し、同じ目線になったり共感したりして援助する。 ○ 偶然出あう身近な自然にも柔軟に対応し、感動できるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 幼児の気付きを大切にし、発見の喜びを味わわせることで、身近な自然への興味を広め、友達と共感できるように援助する。 ○ 幼児が自分と身近な自然とのつながりを意識できるように状況に合わせて様々なかわり方をする。 ○ 人為的及ばない身近な自然の感じ方にも共感できるようにする。 |

(☆視覚から★触覚から◇臭覚から◆聴覚から△味覚からの具体的な自然物)

VI 研究の結果と考察

1 幼児がそれぞれに好きな遊びをする時期に、自分の手で扱える虫がいる雑草園での遊びを設定し、一緒に遊んだり虫のおもしろさを伝えたりして、虫の存在に気付かせるような環境の構成をすることは、虫に興味をもって触れ合い、見つけて遊ぶ楽しさを味わうようになるために有効であったか

雑草園で忍者ごっこをして遊ぼうとA・B児たちを誘う。C児は後から来た幼児たちを「こっちに来ると見つからないよ。」と隠れ場所を教えてくれたので、「いいとこ知ってるね。」とほめると、「俺はいつも来てるから、(知ってるんだよ)ここにはバッタやカエルがいるんだ。」と言う。B児は「やだ。バッタこわい。」と、少し緊張している。教師はB児のバッタをこわがる

気持ちを受け止め、B児のそばにしゃがみこむ。「先生、あっちへ行こうよ。」と言うので、A児やB児にとってC児の雑草園で遊ぶ姿を伝えることは、雑草園に興味をもつきっかけになると考え、C児の遊んでいる様子に気付かせるような援助をする。「どこにバッタがいるの?」と聞くと、C児は「下だよ。探してやるよ。」と、草を両手で分け始める。「今日の忍者はバッタとりの段だね。」と、遊びと結びつくように言葉をかけ、教師がB児を誘って探し始めることにした。B児は教師の洋服をつかみながらも、下を向いて一緒に探しているので、「Bちゃん。草が触れるね。芝山と同じだからね。」と不安を和らげるような声をかけると、B児は「うん。」とうなずく。「いた?」「いないよ。」などの声が聞かれる中、A児は、「お父さんがバッタは跳んでいるって言ってたよ。」と上を向いたり、探している友達の様子を見たりしている。教師はA児の言葉からA児が強がっているのだろうと理解し見守った。

教師がバッタを見つけ指差すと「ほんとだ。」「バッタだ。」「バッタ見た。」と口々に言って、じつとのぞき込む。A児は体を引いているが、B児は身を乗り出してバッタを見ようとする。バッタが逃げようとする、A児やB児も驚きの声をあげながら教師や他の友達と顔を見合わせたり、「跳んだの、見た。」と言ったりする。C児が「俺が捕まえる。」と言ってかがみこむと、B児は「こわくない?かまない?どうやって?」などと言いながら見つめている。C児はつぶさずに捕まえると、教師の用意した飼育ケースに入れ、周囲の幼児に見せる。「Cちゃん、すごいね。」と言われ、うれしそうであった。A児が飼育ケースを持ってB児が飼育ケースの上から眺めているので、二人のC児に憧れる気持ちを受け止め、C児と同じように触れて見たいのだろうと理解し、バッタに触れられるようにする。A児が教師のそばに来たので、教師はバッタを両手で捕まえさせようとした。気付いたB児も「見せて。さわらせて。」と頭を寄せ、手の隙間から見たり触れたりして喜ぶ他の友達の様子を見ていたが、そのうち人差し指をゆっくりと教師の指の隙間に入れ、触れようとした。バッタに触れると「さわった!」と大声を出し、笑顔で教師を見上げた。A児は、「先生、こっちの手をどかして。」と言う。教師は、手を離そうとするが、「だめ。離すと逃げちゃうよ。」と断る。A児は黙っていた。教師は沈黙を見たいのだろうと受け止め、「指一本なら大丈夫だよ。ここから見て。」と話すとうなずき、少し離れてのぞき込んだ。A児に「見える?」と尋ねるが黙っている、表情から満足していないことを受け止めた。バッタをC児に返していると、A児が「先生、探して。僕のがほしい。」と言うので、「一緒に探そう。」と誘った。教師がバッタを見つけ、「Aくん。いたよ。」と言うと、緊張した面持ちで、手は出さないがじつと見ていた。A児が見やすいようにジャングルジムの前の土の上にバッタを放すと「わー。」と歓声上がる。年長児が近くにきて「なに捕まえたの?」「こいつ、足長いなあ。」と言ったのを聞き、A児は「どれが足?」と尋ねていた。B児もC児も他の友達と一緒に、バッタの動きを楽しんでいた。B児が「針がないね。」と言うので、教師は「針がないから触れても痛くなかったよ。」と、B児の気付きに共感した。「先生、山で忍者ごっこしようよ。」と言ってきた。バッタとりに十分時間をとったところで、教師は他の幼児と芝山に戻ることをうながし、芝山でもA児B児、C児と一緒に忍者ごっこをして遊んだ。

降園時、三人それぞれが、迎えに来た母親に「バッタがいたんだよ。」「忍者ごっこのバッタだよ。」「明日もするよ。」と話す姿から、教師は明日の遊びへの期待を感じ、今日の環境を続けようと考えた。幼児の言葉だけでは様子のつかめない母親には、遊びの様子やそれぞれのつまづきに対する教師の願いを伝える。翌日、B児は泣かずに母親から離れ、雑草園に教師を誘ってきた。虫捕りをする日が続き、幼児の中から「先生。見て。バッタつかまえた。」「今日の忍者はバッタだ。行くぞ。」という声も聞かれるようになる。A児やB児もこわがらずに一人で雑草園に入って行き、C児とも一緒に虫を見つけて遊ぶようになってきている。

以上のことから、幼児が自由に入り楽しめるように、高い草を刈ってカエルやバッタ等を見つけやすいように雑草園を整備し、忍者ごっこの場として遊べるように物的環境構成をしたこ

と、それぞれの思いを大切にしそれぞれに虫の存在に気付けるような援助をし、飼育ケースを用意したり虫を見つめる機会をもたせ、面白さを伝える人的環境構成をしたことは、幼児が園内の動植物に興味をもち見つけて遊ぶ楽しさを味わうことができ、有効であったと思われる。

2 幼児が友達と一緒に遊ぼうとする時期に、発見や驚きを楽しみ、触れたり、遊びに取り入れたりする環境の構成を工夫することは、色水になる植物と触れ合って遊ぶ楽しさを味わうようになるために有効であったか

花畑で、D児とE児が「きれい。」「かわいい。」と言いながら、花を摘む姿が見られた。以前、D児は花だけ集め、茎までとらなかったのでもリボンで束ねられなかったり、力任せに引っ張ったので根ごと抜いてしまったりして困っていたが、今は思い通りに摘めるようになり楽しそうである。摘んだ花を砂場でままごとをしているご馳走に使ったり、束ねて「お母さんにプレゼント。」とおみやげにししたりしている。翌日、フーセンカズラの実をとり、「わー、フワフワ。」「気持ちいい。」と手で握ったり、ツルムラサキの実を採ったりしている。D児が「先生、(手を)赤くする?」と聞くので、「したい。」と答える。D児は持っていた実を渡し「ギュとして。」と言う。教師は手を握り、実をつぶして手を開き、「わー。赤くなった。」と驚く。「ねえ。きれいでしょ。」とD児、「ほら見て。私の手も(赤いよ)。」とE児、「ほんとだ。きれいだね。」と教師も手を並べて見せる。「見つけたよね。」と言う、うれしそうな二人を受け止め、「わー。血が出ちゃう。」「緑はだめだね。」などと話しながら繰り返して実をつぶした。

ツルムラサキの実をいくつかとってパンジーやマツバボタンの花びらと一緒に置き、色水作りができるように環境の構成をした。また、芝山や花畑で遊んでいる幼児にはツルムラサキの存在を知らせたり、教師が摘む姿を見せたりした。年長児が色水遊びに取り組み、「先生きれいでしょ。」と、できた色水を見せに来た。4歳児は「きれいだね。」「本当に飲めるの?」「カキ氷みたい。」とそれぞれに見立て、年長児や教師に言葉で伝えている。葉で作った色水を見せに来た年長児は、「これは、お茶だよ。」と4歳児に話しかける。「おいしそう。」「飲んでいい?」と聞かれ、「砂場で飲むんだったら(飲むまねをするなら)いいけど、嘘のお茶だから飲んだらおなか痛くなるよ。」と答える。「(おなか痛くなるのは)やだ。」と不安を感じた4歳児に、「ままごとで使うんだよ。」と遊び方を教え、仲良しハウスに連れて行く。ご馳走になった4歳児は、「先生、作りたい。」と言い、教師もその思いを受け止め、空きカップを持ってくる。「どうするの?」と聞くので「さっき、水を入れたよ。」と答える。教師と一緒に作ったり、年長児に教えてもらったりしながら、花の種類や作り方に気付き、きれいな色水を作ることができた。「わー、色が同じだ。」「イチゴジュース。」「次は、お茶を作りたい。」などと言いながら、繰り返し楽しむ。ペットボトルとジョウゴも、幼児が使えるように準備した。D児は、カップの実だけをつぶして「先生、手についちゃう。」と困っていた。汁が出たことを経験したからだろうと受け止め、「今度は、水も入れるんだよ。」と助言すると、カップに水を入れ「あー良かった、できたよ。」と色水ができたことに安心し、「これ、ブドウジュースだよ。」とE児に見せ、仲良しハウスに持っていった。E児は、2粒の実で取り組んでいた。早く作って遊びたいのだろうと受け止め、「この間もらったから、今度は先生からプレゼント。」と教師のとってきた実を足すとニコリした。E児はD児にカップを見せ、「ほら、もうできちゃった。」と言うが、「でも、少ないね。」と言われてしまう。「じゃあ。お水入れてくる。」と水道の水をカップに勢いよく入れるが色が薄まり、水になってしまう。「なくなっちゃった。」と今にも泣き出しそうな表情のE児に、教師は、「水を入れすぎちゃったね。」と助言し、もう一度とりに行こうと援助した。E児は水を入れる際「今度は消えないように少しにしよう。」と言いながら作っていた。

以上のことから、葉や実などを用意して視覚を刺激する直接体験の場として色水遊びを設定し、ペットボトルやジョウゴをできるように物的環境の構成をしたこと、それぞれの発見や驚

きに共感し、見立てを受け止めたり、作り方を知らせたりする人的環境構成をしたことは、幼児の遊びを盛り上げ、色水になる植物と触れ合って遊びを楽しむことができ、有効であったと思われる。

3 幼児が友達と一緒に遊びを楽しもうとする時期に、幼児の興味を広げ、園内の動植物をきっかけに身近な自然と触れ合って遊べるような環境の構成を工夫することは、好奇心を抱いて遊ぶ楽しさを味わうようになるために有効であったか

サツマイモ掘りの後、イモのツルを遊びに使おうと畑の近くに山にして置く。これに気付いたF児は、山の上に乗る飛び跳ねる。乗ったり降りたりしているうちに、ツルを引いて山の中からツルを引き出そうとする。気付いた他の幼児も「手伝ってあげる。」と言って一緒に引き始めるが、無理なので教師や友達を呼びにくる。尻もちをついたり、ころんだりしながらツルを引き出し、電車や縄に見立てて遊び出す。

この様子を見ていたG児が、「ここにも（ツルの山の下）おイモある？」と聞いてくる。友達の姿を見て、昨日のサツマイモ掘りを思い出したと受け止め、「サツマイモ掘りは楽しかったね。」と返事をし、「Gちゃんも引いてみる？」と誘った。しかし、G児は「やだ、掘りたいの。」と言うので芋が掘りたいというG児の思いに気付き、「このツルが畑にあるときはサツマイモが土の中にあるけど、昨日みんな掘ってしまったからもうないんだ。また、大きい組になったら掘ろうね。」と伝えた。G児がうなずいたので納得したように思えたが、この話を聞いていたF児はシャベルを持ってきてG児に手渡すと、一緒に畑に入って掘り出す。教師は、「やっぱり掘りたいんだね。」と受け止め、そこを掘られては石灰を入れてあるので困ること、砂場や土山、花畑なら良いことを伝えた。「お花畑？」と驚くが、「うん。わかった。」と花畑に走っていく。花畑では、花を摘んだり、実や種をとったりしたことはあるが、穴を掘るのは初めてだったので、期待がもてたのだろうと感じながら追いかける。掘りだすと土が固い所があり「固くて掘れない。」「ドングリが出てきた！」などと言っている。芝山にいた幼児も加わり、「ダンゴムシがこんな所にいる。」「アリがいるよ、寝ていたのかな？」

「虫がいるよ。ほら隠れるよ。」「猫みたいな石がある。」など等を話している。G児は、「おもしろい。ぜんぶ掘ってみたい。」と言う。土の下への興味を広げたいと願い、給食後に、『地面の下の生き物』『足元の生き物』『どうくつ』という絵本を見せた。地面の広がりには驚きの声をあげ、「サツマイモがある。」「幼虫がいる。」「これ何に？」「モグラだよ。」「え。どれがモグラ？」「これがモグラか。」「この虫を知っている。」「みたことがある。」「変な形。」「これはきれい。」等とそれぞれの思いを話していた。G児は絵本を見ながら、

資料1 絵本に見入る幼児



F児に「またしようね。」と笑顔で言っていた。桜の木の下や土山、落ち葉の下等を掘る日が続いた。F児やG児も「ほら見て、本と同じものがあるよ。」「もっともっと広いよ。」「先生手伝って。」等と言いながら掘ったり埋めたりしている。掘りやすいところへ誘ったり、手伝ったりしながら教師も一緒に掘ったり埋めたりすることを楽しむ。陽だまりの砂の温かさに気付いたり、水を入れて掘ったりして日々掘り方も変わり、好奇心を抱いて遊ぶ姿が見られた。

以上のことから、身近な地面の下に感じた興味を広げるために、地面の下のことが描かれている絵本を用意したことは、幼児の絵本を真剣に見る様子やG児の明日への期待の言葉から考察すると、有効であったと思われる。幼児が、地面の下の様子を、自分の経験と結び付けて考えられたことで、興味が広まり、イモ掘りをきっかけに身近な自然に触れ合おうとする意欲が芽生えたと思われる。幼児の経験や感じ方は様々であり、イモの形を見る幼児、アリの穴を探

す幼児、ダンゴムシを見る幼児、バッタを探す幼児とそれぞれの興味を受け止めながら、一人一人の思いに共感し、それぞれの見方を大切にすることも、一人一人の心を動かし、好奇心を抱かせる人的環境の構成として有効であったと思われる。

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

- 幼児の興味の中から自然に親しむための要因を考え、園内で直接体験できる教材について再考した。幼児が園内の動植物をどう感じているかを受け止め、何に気付いているかを理解し、幼児の内面理解に基づいた園内の動植物と触れ合う環境の構成をしたことは、一人一人の思いに応じた援助をすることができ、幼児の身近な自然にふれる機会が多くなったように見受けられ、身近な自然に親しむ幼児を育成する上で有効であったと考えられる。
- 幼児の感じ方は様々なので、同じ環境にかかわってもそれぞれにその思いを受け止め、環境の再構成を柔軟にしていくことも身近な自然に親しむ幼児を育成する上で、大切であることを実感した。自然を知識としてとらえるのではなく、園の環境の中での役割を見出し、幼児なりの意味づけをしている姿があった。「～して遊ぶために必要」、「ないと困るね。」などの有用感に気づき、大切にしようとする思いは、今後の環境教育につながっていくと思われる。
- 今後は、今まで感じてきた身近な自然を遊びに生かしたり、遊び方を知らせたり、試行錯誤したりできるような環境の再構成を考えていきたいと思う。また、人為の及ばない身近な自然である光、風、雨、雲などは多彩で、変化が多く、雄大で、感動することが多いと考えられる。今後は、それらにも親しめるように環境の構成を工夫していきたいと思う。

<参考文献>

- ・ 神長 美津子 著 『保育の基本と環境の構成』 ひかりのくに（平成12年）
- ・ 小田 豊・神長 美津子 編著 『指導計画法』 北大路書房（平成15年）